

打綿機 (三ツ行燈)

ガラ紡績機は臥雲辰致の発明によるもので、この発明により綿から糸を紡出する効率は非常に高くなるという、当時としては画期的な機械でした。

しかし、ガラ紡績機に供給する綿は旧来の綿打ち弓を用いて行なうことがほとんどでした。今回ご紹介する打綿機は、「三ツ行燈」ともよばれ、ガラ紡績機に供給する綿を打つ機械です。

明治二十一年に、時計製造なども行なっていた岡崎の発明家・中條勇次郎が旧来の綿打ち弓を用い、人力ではなく機械で作業を行なえるように考案したのがこの「三ツ行燈」です。「三ツ行燈」の名は灯火具の「行燈」様のものが三つ中に組み込まれていることから名付けられています。



それまで手作業では一日二貫目の綿しか打てなかつたのが、三ツ行燈では五倍の十貫目ほどの綿を打つことができるところになりました。三ツ行燈が考案された明治二十一年の岡崎は「産業革命」の様相を呈したと語られています。

この発明が契機となり、ガラ紡績機の製造に携わっていた岡崎材木町の加藤文治郎、岡崎六供町の石川英治、額田郡伊賀村（現岡崎市）の中野製伊藤磯左衛門らによって打綿機の改良を重ねられ、以後、岡崎では近藤角三郎の「七ツ行燈」、鈴木次三郎の「廻切製綿機」などが次々と開発されました。そのため「三ツ行燈」は、後発の機械に次第に主役の座を追われ、明治末年から姿を消しはじめていきました。

ガラ紡績機による生産体制が整えられたのと時を同じくして西洋式紡績技術による、大型洋式紡績工場が各地で設立され、ガラ紡績機による紡績は一時衰退しました。しかしガラ紡績機による紡績は、洋式紡績とは競合しない太糸・特殊糸の生産や、洋式紡績により発生する屑綿（落綿）を使用するなど新たな局面を開いてきました。また、第二次世界大戦後、日本国内の物資、特に衣料品が不足した際には再びガラ紡績を行なう工場が増加し、急増する需要に応えてきました。戦後の高度経済成長期を経て、ガラ紡績機による紡績はほとんど行われなくなってきましたが、最近ガラ紡績機で紡出された糸を用いた繊維製品が環境に優しい、糸の太さが均質ではありませんがぬくもりを感じるなどの理由で脚光を浴びています。

参考文献

鈴木次三郎家に伝わる「ガラ紡機の沿革」

岡崎とガラ紡工業（昭和四十二年五月）（昭和十七年十月）

企画展

祈りの形と美 郷土人形展

7月18日～8月29日 三重県庁舎1階特別展示室

江戸時代末から明治時代にかけてつくりだされた郷土人形。単なる置物ではなく、人々の祈りが込められたもので、身近にある素材でつくられ、風土に育まれてきたものです。

今回は約一万点の館蔵郷土玩具コレクションの中から、郷土色豊かな人形をご紹介します。



三春張子 (福島)



三次土人形 (広島)



相良土人形 (山形)



稲畑土人形 (兵庫)



相良土人形 (山形)



三春張子 (福島)



三河土人形 (愛知)